

## &lt;報告&gt;

**ミュージカルの発声指導法をめぐる考察**  
 —クラシック発声と地声発声—  
**Teaching Musical Vocalization**  
 — Classical Vocalization and Musical Vocalization —

本島 阿佐子 MOTOJIMA Asako    中西 千春 NAKANISHI Chiharu

学長裁量経費を得た本研究は、ミュージカルの「地声による発声は喉を壊すか」という疑問に端を発する。2018年にミュージカル・コースが新設された国立音楽大学ではクラシック声楽を教える伝統を誇ってきたが、クラシックの歌唱と異なる、地声で歌うミュージカル歌唱はまだ指導法が確立していない。しかも、「地声による発声は喉を壊す」という先入観ゆえに抵抗を感じ、発声に悩む学生は多い。そこで、本研究では「歌うこと」を一から見直し、正しい「地声発声」があるかを、石丸幹二氏の講演、文献研究、身体を重視するヨガと演技の教師のワークショップから探った。そのプロセスの中で、「からだメタ認知」(諏訪, 2012)というアプローチを発声指導に取り入れることに思い当たった。学生に自分の歌唱時のからだの状態を認識させ、地声発声が喉を壊さないことを体感させる。2020年秋現在、クラシック歌唱にもう一つの歌唱スキルを加えることができつつある。

キーワード：ミュージカル、クラシック、地声、発声

ミュージカルの「地声による発声は喉を壊すか」という疑問が、学長裁量経費を得た本研究の始まりである。国立音楽大学で、ミュージカル・コースが2018年に新設された。本コースの特徴は1, 2年次の基礎課程を経た後、3年次よりミュージカル音楽(主にポップス)を学ぶ点、そして、そのために必要な応用技術(地声の歌唱)を学ぶという点だ。しかし、「地声による発声は喉を壊す」という先入観があるために、地声の発声に抵抗を感じ、発声に悩む学生は多い。そこで、「歌うこと」を一から学び直し、正しい「地声発声」があるかを模索した。

石丸幹二氏のミュージカル特別講義(於:国立音楽大学小ホール, 2018.11.14)で、本島は話の聞き役となった。石丸氏が講義で述べたことをリストアップすると次のようになる。

- ・ミュージカルで使う声の幅は、シャウト(大声)からウィスパー、死に際の吐息(最小声)まで大変広い。音楽大学で学ぶ声はその声のほんの一部。  
クラシック歌手はその、ほんの一部の声のところのエキスパートである。
- ・地声は決して悪い声ではない。
- ・人と同じ声がない。その声には個性が出る。(頭声はみな似た響きになる。)
- ・訓練すれば喉は壊さずに、上記の地声発声は可能。

ミュージカルでは、役のキャラクターに合った声、そしてセリフのままに歌うための「地声」が求められる。では、喉に負担がかかるとされた地声を訓練によって正しく発声するためにはどうしたらよいのか。

まず、文献研究(斎田(2016), 萩野(2018), フースラー(1987), 鴻上(2012))を行い、声帯のしくみを中心に、解剖学からみた発声のメカニズムを確認した。また、斎田医師のレクチャーコンサート(2019年9月6日ヤマハ銀座コンサートサロン)に参加した。

次に、フースラー(1987)と鴻上(2012)の共通項目に身体の可視化が重要とあったことを受け、身体のアプローチを重視した2つのワークショップを行った。「ヴォイスヨガ」を提唱している木村周平氏によるワーク

ショップでは（第1回2020年1月18・19日，第2回2020年3月22・23日），歌を離れてからだのワークをすることで，自分のからだのどこを意識して使うべきかを確認して捉えることができた。

また，俳優の島岡安芸和氏のワークショップでは，演劇における滑舌と発声のテクニックを学んだ（第1回2019年7月29・30日，第2回2019年8月26・27日，第3回2020年2月21・28日）。

セリフの話し声が身体を使って鳴らすことができたならその延長は歌う声である。そしてそれこそが正しい「地声」である。芝居に重要な，セリフに気持ちを込めること，そして気持ちをはっきりと聴衆に届ける声を学ぶこと，これらの要素はクラシック歌唱においても大変重要なことである。ミュージカルに必要なこれらを学ぶことは，クラシック歌手にとってマイナスどころか，むしろ有益であるという考えに至った。

他方，本島・中西が国立音楽大学で行っている教師のFD研究から，メタ認知という考えが学生と教師の演奏と教育のかなめであることがわかってきた。メタ認知は一般的に自分の思考や感情を客観的に見て認知することであるが，諏訪の提唱する「からだメタ認知」（2012）では，スポーツ選手を例にとって，選手に自分のからだ運動する際にどのように使われているかを観察させ，「自覚」させていた。

そこで，本研究では，フースラー・鴻上を下敷きにした2つの身体ワークショップをさらに発展させて，諏訪の「からだメタ認知」を発声指導にとりいれることとした。それは，学生が発声時の自分の身体の状態を認識し，ことばで確認することを重視する指導法である。

本稿を執筆する2020年秋では，学生が地声を使って発声しても喉に違和感がないという実感，経験を確認させている。これにより，1・2年で学生が習ったクラシック歌唱を否定することなく，もうひとつの歌い方を学生のスキルに加えていくことが少しずつできているといえよう。今後も，学生に発声メカニズムに関する適切な知識とイメージを与えるとともに，「からだメタ認知」を用いて，自身の体感を確認させる自主的学習を促すことで，迷わない地声発声へと導いていきたい。

## ■学会発表

### 1) 本島阿佐子・中西千春・中西穂高

「音楽大学におけるミュージカルの歌唱法についての考察  
－発声器官からのアプローチ－」（ポスター発表）

日本教育工学会，2019年秋季全国大会，名古屋国際会議場，  
講演論文集 pp. 575-576. (2019年9月8日)

### 2) 中西千春・本島阿佐子・中西穂高

「ミュージカル・スターのインタビューをICEモデルで分析する  
－音楽大学のミュージカル・コース指導へのヒント－」（ポスター発表）

日本教育工学会，2019年秋季全国大会，名古屋国際会議場，  
講演論文集 pp. 63-64. (2019年9月7日)

## ■参考文献

フレデリック・フースラー，イヴォンヌ・ロッド＝マーリング 『うたうこと Singen 発声器官の肉体的特質－歌声のひみつを解くかぎ－』 須永義雄，大熊文子訳 音楽之友社，1987年

鴻上尚史 『発声と身体のレッスン』 ちくま文庫，2012年

諏訪正樹 「“からだで学ぶ”ことの意味」 *KEIO SFC Journal* Vol.12 No.2, 2012年 pp. 12-17.

斉田晴仁 『声の科学 歌う医師があなたの声をデザインする』 音楽之友社，2016年

萩野仁志, 後野仁彦 『人生最高の声を手入れる6つのステップ』音楽之友社, 2018年

この研究は2019年度教育改革推進のための学長裁量経費の助成を受けました。

